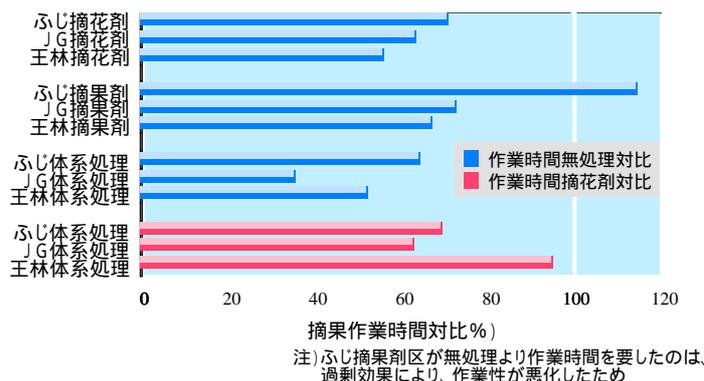


りんご摘花剤・摘果剤利用による省力効果

リンゴの摘果作業の省力化のため、摘花剤（石灰硫黄合剤、蟻酸カルシウム）と摘果剤（NAC水和剤）の使用により、摘果作業時間の大幅削減が可能である。



摘花剤(石灰硫黄合剤)の使用により、摘果作業時間の40%前後の省力化が可能である。

また、摘花剤と摘果剤(NAC水和剤)の体系処理により、摘花剤単用と比較し、更に30%程度の省力化が期待できる。

図1 摘花・摘果剤及び体系処理利用による摘果作業の省力効果(1995～1997)

表1 摘花・摘果剤の処理による果形・サビへの影響(1997)

品種	処理区	処理回数	L/D比	種子数(個)	サビの発生指数		
					梗あ	胴	がくあ
ジョナ	摘花剤	2	0.90	3.1	1.12	0.03	0.00
	摘果剤	1	0.90	3.7	0.91	0.13	0.07
ゴールド	体系処理	2+1	0.88	3.2	0.70	0.00	0.04
	無処理		0.88	3.7	0.86	0.04	0.08
王林	摘花剤	3	0.99	4.2	0.77	0.20	0.05
	摘果剤	1	1.01	5.0	0.38	0.15	0.05
	体系処理	3+1	0.99	3.4	0.50	0.39	0.01
ふじ	無処理		1.00	5.6	0.69	0.29	0.11
	摘花剤	2	0.91	4.3	0.73	0.71	0.10
	摘果剤	1	0.90	4.9	0.48	0.43	0.06
ふじ	体系処理	2+1	0.91	3.0	0.55	0.90	0.09
	無処理		0.90	4.6	0.59	0.32	0.05

注1) L/D比は、縦径/横径

2) サビの発生指数は、無:0～大:3

摘花剤、摘果剤の使用により、種子数がやや減少し、サビ果の発生が若干助長されるが、実用上問題のある程度ではない。

なお、各剤の使用時期、方法は、防除基準の成長調節剤使用基準を参照のこと。

表2 蟻酸カルシウム使用による摘花及び省力効果(1998)

品種	区名	結実率 (%)				摘果作業	
		頂芽	腋芽	時間	無処理比		
		中心果	側果	全果	(min/樹)	(%)	
ふじ	処理区	65.7	9.3	18.5	6	10	58.8
	無処理区	76.5	19.8	31.3	11.2	17.7	100
ジョナ	処理区	75.5	0.9	14.6	2.6	4.3	60.6
	無処理区	74	5.1	18.2	5.5	7.1	100

注) 処理区は、満開2日後に蟻酸カルシウム、4日後に石灰硫黄合剤散布し、摘果剤としてNAC水和剤を散布

摘花剤として満開2～3日後に訪花昆虫に影響の少ない蟻酸カルシウム、頂芽の側果及び腋芽対象として石灰硫黄合剤の使用により、石灰硫黄合剤の2回散布と同様に省力化が期待できる。